

林 直樹 さん

WISE 2 期生 国際感染症学院 寄生虫学教室 出身

現在、どのような研究や仕事をされていますか？簡単にご紹介ください。

私は現在、北海道大学獣医学研究院の寄生虫学教室で助教として勤務しています。大学院修了後、そのまま同じ教室で助教になりました。

大学院に引き続き、エキノコックス（多包条虫）を始めとしたヒトや動物に病害をもたらす寄生虫について、ゲノム解析からその起源や拡散経路、さらに進化過程の解明を目指しています。

卓越プログラムの活動で、一番印象に残っていることや面白かったことは何ですか？

海外インターンシップです。私はモンゴルに2週間半滞在し、現地研究機関のチームに同行させてもらって、モンゴルにおける野外疫学調査を行いました。特にそれまでは国内ですでに収集されたサンプルをもとに解析を行うことが多く、自身で海外調査を行い自然環境からサンプルを採取する経験は、とても貴重なものでした。また、実際に問題となっている流行地域を訪れ、何ができるのか、どのような研究題材を考えられるか、「目で見て肌で感じたものをもとにアプローチを考える」ことの大切さを学ぶことができ、自身にとって非常に大きな収穫になったと思います。

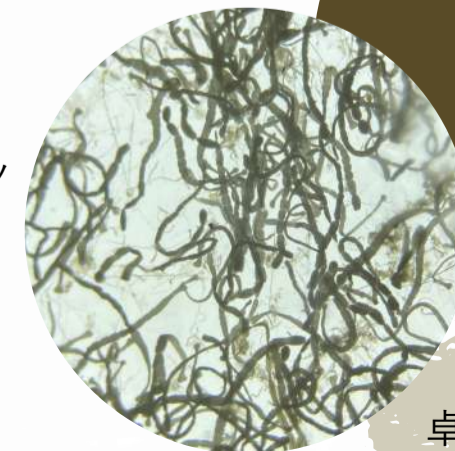
帰国後も本経験を活かして、北海道内で積極的に野外サンプリングを実施しました。これらのサンプルは実際に博士論文の題材にもなっています。卓越プログラムで得られた知見、経験はこれからの研究でも大きな力になるものと思っています。



大学院で学んだ One Health について、重要だと感じたことは何ですか？また、現在の研究に活用できていること、または活用していきたいことがありましたら教えてください。

ヒトで問題となる寄生虫症の多くは人獣共通感染症であり、ヒト以外の感染宿主が存在します。例えば、エキノコックスは自然界ではキツネとネズミの捕食-被捕食関係の中で生活環を維持し、ヒトはキツネから排出された虫卵を経口的に摂取することで多包虫症に感染してしまいます。寄生虫自体を完全に根絶することは困難であるため、寄生虫症をコントロールし、感染リスクを最小限にする方策をとる必要があります。

そのためには、ヒトだけでなく、野生動物の生態や環境要因にも着目し、ヒト・動物・環境を連続的にとらえる One Health アプローチが必要不可欠です。現在はインターンシップで得た経験、ならびに卓越大学院プログラムで培った One Health 的観点を活かし、北海道や本州で宿主動物を対象にした研究も進めています。



先輩たちへのアドバイス

卓越プログラム関連のイベントには積極的に参加するとよいと思います。